

地方創生から つながる・始まる 地域おこし 第二弾

【第2回】 地域発の次世代教育システム



土井 隆氏
どい・たかし

鹿児島県長島町地方創生統括監
株式会社コアース代表取締役
慶應義塾大学SFC研究所所員

■プロフィール

慶應義塾大学環境情報学部卒業後、楽天を経て、株式会社ルクサでEC事業に従事。2012年に株式会社コアースを設立し、市民活動を支援するWEBサービスをプロデュースする。2016年から慶應義塾大学SFC研究員として、地域社会における教育の研究を行っている。

2017年より鹿児島県長島町の地方創生統括監として、現場での地方創生に取り組んでいる。

地域の教育を考える

学校教育が大きく変わろうとしています。2020年に大学の入試制度が大きく変わるのを受け、高校教育は詰め込み暗記型から、自分で考え、表現し、判断し、実際の社会に役立てる力を育むことが重要視されます。また、グローバル化の進展に伴い、多様な文化や言語の人と一緒に働くことが当たり前になる未来を見据えて、英語教育が小学生から本格的に行われます。

高校ランキングを見ると、私が生まれ育った神奈川県では、すでに下克上のようにランキングが入れ替わっています。鹿児島でも同じように、学校ランキングの入れ替わりが起こりつつあります。

その一方、人口減少に伴い、小・中・高等学校の合併が進んでいます。私のいる長島町でも、2007年に町唯一の長島高校が廃校になりました。地域から学校が無くなると、人口減少は加速度的に進んでいきます。全国では高校を無くさないよう、高校の魅力化を進めている地域が多くあります。

インターネットで 地域の教育が変わる

長島町では高校が無くなり、生徒たちは地域の外へ通学するか、寮に入って高校生活を送るかの選択をします。どちらにしても費用が要するため、教育にかかる費用は大きくなります。そこで考えたのが、インターネットの動画授業を行う通信高校と連携し、地域に居ながらにして高校に通うことができる仕組みをつくることです。

カドカワ株式会社が手がけるインターネットの高校「N高等学校」をご存知でしょうか？授業はすべてインターネット動画で受けて、SNSを使って同級生や先生と交流し、これまでとは違った高校生活を送る新しい学校が2016年にできました。N高等学校の双方向授業システムを活用し、都市部と地方の教育格差をネット教育で解消することを目指して、昨年「長島大陸Nセンター」をつくりました。



長島大陸Nセンターの取組み

長島大陸Nセンターでは、大きく区分すると町民の子どもたちを対象とした「キャリア教育」と、町外にいる子どもたちを受け入れる「地域留学体験」を行っています。

キャリア教育では、元劇団四季の女優や国連職員など、地方ではあまり出会うことがない仕事をしている人を招いて講演を

しています。地域にいと知ることができない仕事も、ネットで検索すれば知ることができますが、知り合うことはなかなかできません。

また「地域留学体験」では、島TECHというプログラムを定期的に行ってきました。都市部の高校生を受け入れて島内で民泊してもらい、その家の家業を伝えるウェブサイトが高校生が制作するという取り組みです。都市部の高校生にとって、漁業や農業の体験は強烈に記憶に残ります。それを伝えるためのWEBサイト制作を通じて、その家庭と深く関係を作っていきます。結果、そこには新しい縁が生まれ、戻った後も交流が続いています。

今年の8月には、現実社会を題材に、生きる力を学ぶ学校用学習教材を作り提供している「教育と探求社」と連携して、町の子どもたちを対象とした「ソーシャルチェンジ」というプログラムを実施しました。2日間のプログラムを通して、子どもたちが町の社会問題を見つけ、解決するプランを提案するというものです。地域にいと当たり前風景ですが、関係性が強い地域こそ、このようなアクティブラーニングが実践できる場所になっています。

また、英語教育では、一般的に地方と都市では地方の方が偏差値が低い傾向にあります。理由はいくつかあると思いますが、私は地方にいと外国人に出会う機会や英語を使う場所が非常に限られているのが原因のひとつだと思います。インバウンドの観光なども、地域の子どもたちがガイドをする仕組みにするなど、教育と産業を一緒に解決できる仕組みを作っていきたいです。



2020年、地域は教育の最先端になる

教育改革は、社会で生きる力をつけていくことを目的としています。地域には、どの教科書にも載っていない課題やテーマがたくさん眠っています。地域に入り込むことで課題を見つけやすく、自分が何のために働くのか、考えることができます。2020年には、AO入試(出願者自身の人物像を学校側の求める学生像〈アドミッション・ポリシー〉と照らし合わせて合否を決める入試方法)や推薦入試が、国立大学を含めて大幅に増やされます。

私が研究所の所員をしている慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでは、AO入試を早くから採用しています。ここでは、受験生が学びたい学問や、そのように考える理由などを学校にアピールします。ここでは、教科書には書かれてい

ない子どもたちの意欲が問われます。そのきっかけを作れるのは、地域なのかもしれません。



良い教育は良い地域につながる

一般的に、地域から人が転出するタイミングは、「進学」と「就職」です。地域に「良い教育」があれば、人は出ていかないどころか、集めてくることもできるのではないのでしょうか？ 移住定住政策で「仕事」や「家」の話が多く出ますが、「教育」も併せて考えてみる必要があると思います。

長島大陸Nセンターは、鹿児島純心高等学校と連携協定を結び、定期的に関く教育プログラムに高校生が参加してくれます。また慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスとは、地域おこし研究員という制度をつくり、地域の研究を行う大学院生を積極的に受け入れる取り組みを進めています。すでに新しい人の流れが起きつつあるのです。



人口循環社会をつくる

私が思い描くこれからの教育は、学校の枠を飛び超えて、いろいろな地域の生きた人とコトを学ぶものです。高校生もインターネットを使えばどこでも学べるので、3年間で全国のいろいろな地域を渡り歩いて学ぶことができます。地方から都市へ学びに行くだけでなく、地域の拠点に都市から学びに来ることもできます。全国47都道府県にそれぞれ友人がいるだけでなく、海外にも友達がいる。そんな世代が、次の社会を作っていくのだと思います。

